

今年度から読書感想文は、1年生と希望者への夏休み課題となりました。本を読んで何も感じない人は少ないと思いますが、感じた気持ちを文面にし、誰かに読まれる文章にするのには誰もが苦手意識がありますよね。長いようであっという間に過ぎてしまう夏休み、早めに課題に取り組めるように今号の図書館便りは読書感想文特集です。

読書感想文



Q.「課題図書」「自由図書」ってなんですか？

A.読書感想文コンクールの主催者が指定した本を読んで書くのが「課題読書」です。本の専門家の先生方が、新しく出版されたたくさんの本の中から、年齢に合わせて、多くの感動を得られたり新たな知識を得られたりする本をフィクション、ノンフィクション、外国作品など幅広く選んだものです。一方、自分で読みたい本を自由に選んで読書感想文を書くのが「自由読書」です。フィクションでも、ノンフィクションでもかまいません。

Q.感想文は、何のために書くのですか？

A.書くことによって考えを深められるからです。読書感想文を書くことを通して思考の世界へ導かれ、筆者が言いたかったことに思いをめぐらせたり、わからなかったことを解決したりできるのです。「読書感想文」は考える読書ともいわれます。また、どんなに強く心を動かされても、時がたてばその記憶はうすれてしまいます。読書感想文は自分自身の記録です。読み返すことによって、いつでも「感動した自分」に出会うことができるの

Q.どんな本を読んだらいいのかわかりません；

A.思いっきり楽しめたり、自分を見つめなおしたり、新しいことを教えられたり……。自分の心を突き動かしてくれる本が、その人にとっての「良い本」だといえます。自分に合った、心を動かされる本を探してみましょう。迷ったら自分のことをよく知っている人、家族や、担任の先生、部活の先生、図書館司書に相談してみましょう。友達と話し合うのもいいですね。

Q.本の本文や解説などを引用してもいいですか？

A.できるだけ自分のことばを使って書くようにしましょう。確かに解説やあとがきなどは、本の世界をより深く解説するために参考になることがあります。ですから、場合によっては引用する必要が出てくるかもしれません。そのときには、どうしても必要な部分だけ「」（カッコ）でくくみましょう。

Q.題名はどうつけたらいいですか？

A.本を選ぶとき、本の題名を見ながら「おもしろいかな？」とか「読んでみようかな？」と考えることはありませんか？魅力的な題名は人を引き付ける力があります。せっかく書いた読書感想文ですから、人が読んでみたくなるような題名を考えましょう。自分が一番感動したことやもっとも言いたいことの、中心となることばを考えて題名にするといいでしょう。

Q.何をどう書けばいいのかわかりません；

A.本を読んで自分がどこに感動したのか、なぜ感動したのか考えてみましょう。そして、もう一度本を読んでみましょう。自分の生き方や経験と、本の世界とを照らし合わせると、いろいろなことが見えてきます。感じたこと、思ったこと、連想したことなどを忘れないうちにメモをとっておきましょう。そのメモを補ったり、順番を入れ替え、どう書いたら自分の心の動きにぴったりするか？それが人にうまく伝わるかを考えてみましょう。

課題図書



読書感想文の開催趣旨について

- ◇子どもや若者が本に親しむ機会をつくり、読書の楽しさ、すばらしさを体験させ、読書の習慣化を図る。
- ◇より深く読書し、読書の感動を文章に表現することをおして、豊かな人間性や考える力を育む。
- 更に、自分の考えを正しい日本語で表現する力を養う。

『銀河の図書室』

名取佐和子 著 実業之日本社 1,870円



県立野亜高校の図書室で活動する「イーハトー部」は、宮沢賢治を研究する弱小同好会だ。部長だった風見先輩は、なぜ突然学校から消えてしまったのか。高校生たちは、賢治が残した言葉や詩、そして未完の傑作『銀河鉄道の夜』をひもときながら、先輩の謎を追い、やがてそれぞれの「ほんとう」と直面する。今を生きる高校生たちの青春と、宮沢賢治の言葉が深く共鳴する感動長編。

『夜の日記』

ヴィーラ・ヒラナンダニ 著 山田 文 訳
金原瑞人 選 作品社 2,420円



1947年、インドはイギリスからの独立とともに、パキスタンと分離しふたつに分かれてしまう。ちがう宗教を信じる者たちが、互いを憎みあい、傷つけあっていく中、ニーシャーとその家族は安全を求めて、長い旅に出た。自分の思いをことばにできない少女が亡き母にあてて、揺れる心を日記につづった一冊。

『「コード」のぼくが見る世界

：聴こえない親のもとに生まれて』
五十嵐 大 著 紀伊國屋書店 1,760円



ときに手話を母語とし、ときにヤングケアラーとみなされて、コードは、ろう者とも聴者とも違うアイデンティティをもち、複雑な心を抱えて揺れ動く。作家である著者が、幼少期の葛藤や自身のなかにある偏見と向き合いながら、コードの目を見た世界を綴る。映画「ぼくが生きてる、ふたつの世界」原作者のエッセイ集。